

百濟康義 Kudara Kōgi

(31.5.1945 - 12.5.2004)

(昭和二十年五月三十一日－平成十六年五月十二日)

– *Worte des Gedenkens* –
– 百濟康義氏を偲んで –

Collegium Turfanicum
Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften

Berlin
3. September 2004

五月十二日の朝早く、百済康義氏逝去の悲しい知らせが、インターネットを通して私の元に届いた。彼は清廉潔白な、とても良い友人であり、傑出した学者であった。彼の深く根ざした敬虔さは、癌により引き起こされた苦しみや困難な時も、彼を助けたであろう。現世での最後の瞬間、彼はひょっとしたら、私たちが昨年秋にまだ、共に研究に取り組んでいた Abitaki の中に描かれた人生に思い至ったかも知れない。このウイグル語写本の第四巻は、何世紀にもわたる阿弥陀信者の多数の伝記を含んでいる。彼らは皆、確実に Sukhāvati、つまり浄土に生まれ変わることを確信して、死去したのである。

百済康義氏はこのような宗教的確信と同時に、他の人々を幸せにする現世的な面も持ち合わせていた。彼の限らない親切さと好意は、その深い学識と結び付いており、この両方の特性ゆえに、私は彼を友人であり、学者であると呼ぶのであり、彼は記憶の中に留まり続けるであろう。彼と知り合った人は誰でも、彼の率直さに驚かされぬことはなかったが、その率直さは、彼にとっては自然なことであった。彼は、大きなプロジェクトを成功させる影響力を持っていた。そのプロジェクトによって、彼自身だけでなく、他の多くの人も利益を得たのである。彼は、病にも関わらず、2003年の9月に京都で、東トルキスタンへの日本の大谷探検隊を記念する大きな国際学会を企画した際、賞賛を勝ち得た。西本願寺の援助により、この京都における国際学会は、大きな成果を上げたのである。

私が1979年にパリで百済康義氏と個人的に知り合う前に、私は Annemarie v. Gabain 女史を通じて、彼と手紙のやりとりをする機会を得た。彼との最初の共同研究は、阿弥陀信仰についてであったが、それは私が70年代の終わりに、古代トルコ語の頭韻詩に取り組んでいた時であった。その際、Reşid Rahmeti Arat により“Eski Türk Şiiri”に出版された、しばしば Abita という名前が現れる印刷断片が、とりわけ私の注意を引いた。この詩は、浄土真宗の主要経典の一つである『観無量寿経』の自由な翻訳ではないか、という私の当初の疑念を、百済康義氏が、当初ためらった後に確認してくれたとき、私はとても嬉しかった。そこから『ウイグル語の観無量寿経』という題の小さな共著の本が、出来上がった。

その題字を藤枝晃教授が、あとがきを山田信夫教授が書いてくださったのである。浄土信仰の漢語文献のウイグル語訳、もしくは漢語文献自体は、いくつかのさらなる研究の出発点となった。橋瑞超によりトルファン文献学草創期に出版された大 Sukhāvatiṣyūhasūtra のウイグル語訳を彼が再出版したことは、それ以来の研究の進歩を明確に示している。後に彼は、イスタンブール所蔵品の中に、同じ経典の未知の漢語訳の断片を発見した。この経典群に関する知識にとってこの発見は、重要な貢献をなしたのである。

同様に重要なものとして、彼がTTVBに出版されたベルリン収集品のウイグル語テキストを法華経の注釈の翻訳であると比定したことを、絶対に挙げねばならない。同じ注釈の他の写本断片を彼は、さらに羽田博士収集品、ストックホルム収集品、パリ収集品のなかに発見したのである。

Avataṃsakasūtra (華嚴経) は他の分量の多いテキストであり、そのウイグル語訳にも多くの断片が残っている。それを彼は一人で、または小田寿典氏とともに、出版した。

百済康義氏は驚くべきエネルギーで、名古屋から天理まで日本収集品中ばかりでなく、東から西までヨーロッパ収集品中にまで資料を探し求めた。ロンドン、ストックホルム、ヘルシンキ、イスタンブール、ベルリンへの旅行において、彼はまず最初に、その時間を漢語仏教文献に捧げた。その発見の成果は、彼自身が「試行本」と名付けたカタログの中に、見ることが出来る。最後の数年間、彼はベルリンの漢語仏教文献カタログの続行と完成に、多くの時間を費した。しかし彼の興味はとりわけ、非漢人の中央アジア諸族の仏教文化にあったので、彼はソグド語やウイグル語で書かれた漢語卷子本の裏面テキストに関する調査にも携わり、言語の異なる文書にも、好奇心を持って立ち向かったのである。

彼の漢字混じりのウイグル語文献に関する興味を通して、私のそのような文献に対する興味も呼び起こされた。漢字に基づいて、彼はそれらの文献を、仏教文献にインターネットを通して簡単にアクセスできるようになる前に、阿含経、慈恩伝の一部、阿毘達磨文献、もしくは温浴経に比定することができたのである。

彼は、新たな道を示したその最初のトカラ語阿毘達磨文献についての研究から、後にウイグル語(古代トルコ語)とソグド語の仏教文献の研究へと、研究の重点を移した。ウイグル語のものは彼自身が、ソグド語のものは常に Werner Sundermann 教授と共に編集した。

彼は常に厳密さと文献の正確な理解を持ち合わせていた。彼の論文は、良心的なテキストの再現、可能な限り深い作品の内容理解において秀でていた。

多くの研究を彼は今や、最後まで終えることが出来なくなってしまう。確かなものを示すことが、いつも彼の目標であった。Klaus Röhrborn 教授は1988年に、日本の文献学者の研究に関する本を出版した。百済康義氏がその中に二度も現れることは、確かに偶然ではない。

百済康義氏が、ある壁画に描かれた幾人かの僧侶と、彼らの名前について論文を書いたとき、ひょっとしたら、失われたベゼクリク出土の Prānīdhi の絵を復元することに、思い至ったのかも知れない。彼は、最後の数年間、このプロジェクトを実現させるためにも、力を注いだ。実

際、2003年の会議の折りに、陶器のタイルでできた二つの大きなPranidhiの絵が示された。それは彼の考えと草案に基づき製作され、現在は龍谷大学の建物を飾っている。その製作に当たって、非常に困難であったのは、DīpaṃkaraのPranidhiの絵の再構成である。というのも、この絵についてはただ、Albert von Le Coqによる単色の再現図があっただけだからである。多色での再現はそれゆえ、確かにこの壁画の新たな製作でもあったのである。

百済康義氏が大学の教官としてどのように働いていたかを、私はただ噂によって評価するしかない。彼はとりわけ、サンスクリット語の授業を行い、これを可能であればいつでも、中央アジアの古い文化に関する彼の研究と結びつけたという。それゆえ彼は、疑いなく、彼の意気込みと模範によって、若い人々を、とても離れた地域に慣れさせる動機を植えたであろう。もっとも、シルクロードと中央アジアは、大谷と橘の時代以来、魅力的な点であるが。

ウイグル語の観無量寿経に関する共同研究の後、百済康義氏はabitakiという題を持つ多くの写本に取り組んだ。この写本は明らかに、ある、もはや存在していない、おそらくは失われた阿弥陀仏教の漢語作品のウイグル語訳であった。

アンカラの断片を彼は、Klaus Röhrborn、Ahmet Temirとともに編集した。一つの共同編集について、彼は最後まで働いていた。今や、この研究を彼の意味で終えることと、学術的に公開することは、一つの義務である。

さらなるプロジェクトは、Vimalakīrtinirdeśasūtraへのウイグル語の注釈に関する研究となるはずであった。彼の最後の論文の一つは、このテーマのために捧げられた。今、この注釈の出版が、フンボルト財団によって助成されたプロジェクトによって、成し遂げられることを願っている。

彼はいつも自分の故郷の町と結びついていた。山口県阿川の僧侶と、京都の龍谷大学の教官、研究者とは、空間的には500キロ以上離れていたが、それは彼にとっては一体をなすものであった。

葬儀は、2004年5月26日に阿川の善照寺において、盛大に営まれた。院号として、百済康義氏は「回鶻」（ウイグル）を選んだ。それによって彼は、その「浄土」における滞在のために、彼の古代ウイグル人たちに対する興味を明確に表現しようとしたのであった。すでに何年も前、彼とその令夫人が、二番目の息子を「高昌」と名付けたときに、彼はこの親近感を明らかにした。というのも、「高昌」は私たちがQochoもしくはChotscho、漢語の発音でGaochangとしてよく知っている都市に当たるからである。彼らにとって最初の子供となる娘を彼らは「まに」と名付けた。この名前は、おそらくはサンスクリット語のmaṇi「宝珠」と解釈されうるのだろう。

百済康義氏は陽気で、率直で、社交的な人であった。私たちの多くは彼を単に、「こうぎ」と呼んでいた。もっとも、彼の名前にはもう一つの呼び方、「やすよし」、つまり彼がとりわけ家族内で呼ばれていた呼び方、があった。たった1度だけ、私は彼をこの名前でインターネットに発見した。それは、彼が2002年、龍谷大学での会議の主催者に、名を連ねていた時であった。彼はその学問的な質とともに、器用さとセンスを持ち合わせていた。

彼の名前の両方の構成要素、康「平和」と義「公平さ」は、人間にとってもっとも大切な性質である。私は、彼が自分の名前にとって、名誉となったと思う。まだこの世界にいる我々、そして我々の後に続くものが、彼を範と仰ぎますように！

私はこの文を、百済氏がつい最近に公表し、私が推測するには、その古代ウイグル人たちとの関係から、彼にとってとても大切なものとなっていたであろう文献からの引用で締めくくりたい。それはあるウイグル王女Kaṣ Katunへの賛歌である。彼女はイスラムに改宗した周囲の中にあつて、まだ固く仏教に根を下ろしていた：

善逝たる仏宝を始めとする三宝において、
（御身が）欠けることのない堅固な清い信心あるものであること故に、
（御身が）雑多な宝で飾られた身ある者と成ることからも、
「宝もち美しい」と、インド人たちは御身と呼ぶ。天よ！

岩の塊をすばらしく、美しい斜面と氷のある山の巖にて、
カラ・コージョ（高昌城）の中央に、安座を（御身が）得たことにより、
「カシュ（翡翠）夫人」とウイグル人たちは御身と呼ぶ。天よ！

黒い山で雪を飾りとして持つお方！
漂い立つ雲の塊を乗り物として持つお方！
囊（？）のような雨の水を賜物として持つお方！
すべての人の子たちに利益をもたらすお方！

(笠井幸代 翻訳)